

角屋（すみや）の Q&A

Q 角屋は遊廓の店ですか？

A 角屋は遊廓の店ではなく、今の料亭にあたる揚屋（あげや）という業種の店です。揚屋には太夫や芸妓を抱えず、置屋から派遣してもらって、お客様に歌舞音曲の遊宴を楽しんでいただくところです。揚屋は江戸時代、民間最大の宴会場でした。そこでは遊宴のみならず、お茶会や句会なども行われ、文化サロンとしての役割を果たしていました。そのため、揚屋建築は、大座敷に面した広庭に必ず茶席を設け、庫裏と同規模の台所を備えていることを特徴としています。ちなみに、いわゆる遊廓の店には、大座敷、広庭、茶席などはなく、ほとんどが小部屋のための構造であります。

Q なぜ揚屋というのですか？

A 江戸初期から中期までの揚屋は、間口が狭く、奥行きのある小規模建物であったため、一階を台所および居住部分とし、二階を主たる座敷としました。その二階へお客様を揚げることから「揚屋」と呼ぶようになりました。やがて江戸中期の宝暦（1751～1763）以降、京都や大坂の揚屋は隣接地を買い増し、天明4年（1784）には揚屋のほとんどが一階を主たる座敷にして大座敷や広庭を備え、大宴会場へと特化してゆきます。一方江戸の吉原では、宝暦7年（1757）を最後に揚屋が消滅し、揚屋のない町に変化しました。

Q いつまで営業していましたか？

A 揚屋としては明治5年（1872）まで営業し、それ以降はお茶屋業に編入されました。お茶屋業としては、昭和60年（1985）まで「松の間」において宴会業務を行っていました。また、揚屋は「一見さん」（紹介のない方）を迎えることがなく、支払い「つけ（掛売り）」のみで、現金決済を行いませんでした。

Q なぜ格子造りの外観になっているのですか？

A 角屋の外観の格子は、近世初期の京都町屋に広く使用されていた格子のすがたを伝えています。したがって、江戸吉原の花魁（おいらん）を見せるための牢屋のような格子（籬 まがき）では決してありません。

Q なぜ赤壁になっているのですか？

A 角屋の壁は赤色がすべてではありません。赤壁の他に、白漆喰（しっくい）壁、黄色の大津磨き壁、浅葱（あさぎ）色（ブルーグレー）の九条土壁、淡い茶褐色（ベージュ）の聚楽土壁があります。赤壁はもともと揚屋など花街の壁ではありません。角屋より古い建造物を調べますと、社寺の書院、客殿に使用された高級壁であることが判明しました。揚屋がそうした高級壁を用いることによって、並みの建物でないことを示したものと思われます。また、赤壁は華やかなものですから、祇園などの花街に多く用いられています。

Q なぜ室内は真っ黒に煤けているのですか？

A 昔の照明は、蝋燭を灯す燭台や灯油の行灯が用いられました。室内を明るくするためには、たくさんの蝋燭を灯すことが必要でした。その結果、油煙で天井、襖などの室内が真っ黒に煤けたのであります。ちなみに、角屋を訪れた司馬江漢の日記には「燭台数十、昼の如く照らす」とあります。